



井上道義の 未来だった今より

劣等感＝コンプレックスと思われがちだが、正しくはインフェリアルコンプレックス。優越感を保ちたい気分も精神のゆがみととらえ、スーパーリアコンプレックスと呼ばれる。父親がアルコール依存症、祖父や兄という存在がない家庭育ちの僕は、年長者を敬う感覚が育たなかったらしく、若いころは目上に刃向かう傾向が強かった。

実力も才能も魅力もあると認める人には問題がなかったが、世間的に高い立場だけの人や、若者を見下す人、野心だけで才能のないやからにはタスマニアデビルのようにかみついていた。

14歳で指揮者なんて目指したのも優越感を保ちたいからだったのかもしれないが、父親や先生や先輩たちのように「なりたくない病」が僕の心のコア部分を占めた期間は長かった。酒の席やゴルフ場でないと本音が言えない社会、自分をピラミッドの頂点に立たせ

るためなら媚びへつらい気をつかう生き方、それらを嫌悪していた。

随分前だが世界的なオーケストラを指揮したとき、人間関係のマイナス点を見つけることのみエネルギーを使う「みんな95点以上」の優秀樂團のありさまは「目からうろこ」。ああ！そうか！上に行くとなを見るほかなくなるんだと、ショックは大きかった。ここ10年、僕は目の前の人を直視すること、自分をできる限り生かす環境作りに集中している。明日はどうなるかわからないし、上に登って見える景色が、切り立った岩だらけで空気も薄い凍りつくところと知ればアタシャそんなところにいたいほど落ちぶれていないと感じるからだ。人との比較の上の優越感は、劣等感や嫉妬と同じく最低な感情で人を汚すと思いませんか？

(オーケストラ・アンサンブル)
金沢音楽監督

♪
優越感